

心身を鍛えてくれた

満蒙開拓団に、

今日の幸を感謝する

愛媛県 越智 國重

私は愛媛県周桑郡丹原町の農家の三男として生まれました。九人兄弟で、次男は沖繩で戦死し、私は満蒙開拓義勇軍に志願した。この義勇軍は昭和十三年（一九三八）年からでき、応募した十六歳〜十九歳の青少年は、右手に銃、左手に鋤で、満州の五カ所で訓練された。

その前に茨城県原原訓練所で二カ月間、主宰者加藤完治先生から訓練される。体の良い者のみ全員宿舍です（昭和十三年から二十年まで）。そして満州五カ所、そこで三カ年の訓練を経て、兵隊、満軍、満鉄へとそれぞれ入って行った。

関東軍からは軍人が来て訓練をし、その後は農

作業、剣道、角力を教育される。それであるから、ソ連軍は義勇軍は強いからといやがっていたという。

義勇軍八万人のうち七万人は兵隊にとられた。

義勇軍で訓練を受け、五〜八カ月までに軍人になったのである。我々は八月終戦、九月には非常呼集があり、ソ連軍と戦争状態に入った。しかし、我々は戦争したくても兵器が無いので戦うことはできなかった。武器のみならず、水筒も竹筒だし、短剣のさやも竹だった。

銃は、三八式歩兵銃で三カ月訓練をしただけ、先程、非常呼集がかかったと言ったが、ソ連兵が入って来たのだが、戦うことはできなかった。兵隊の主力は沖繩や南方へ行ってしまい、訓練を受けた者がいないのだ。私は二等兵の未教育者。

武装解除はヘルピンの指導でされた。その後、ソ連軍の十輪車にホロをかけた軍用自動車に

乗せられて「釜山へ行く」と嘘をつかれ、ソ連に連れて行かれるのである。

自動車から降ろされた所は釜山ではなく、ソ連のリッチホックと言う所で、そこは収容所であった。

何も無い中で、家も無い。一個中隊（二百五十人位）で、将校もいなかったが、下士官も分離され、兵ばかりで、肩章を取った。自分達兵隊だけで家を建てるのだ。何も無いのだから山の木を切った。

道具はソ連兵がくれた。鋸は二人で引っ張って使うのだということであり、私も初めて使うものであった。

とにかく、昭和二十年の九月頃、連れて行かれて、山の中で鋸を使って木を切り、自分達の住む家を作るのだというのである。勿論電気も何も無いのだから、灯の代わりに、松の木を割って燈りにして共産党の教育を受けたのである。

この教育を受けないと、国へ帰してくれないと言うので、教育を真面目に受けざるを得なかった。

六十人のうち、五、六人が選ばれた。私は開拓団で満州にいたから、気候や生活に馴れていたの  
で、ここで生活するのに馴れたし、体力も強かった。とにかく、昭和十五年から満州にいた体験者であったので幸いであった。思えば、何が幸いするか判らないが、体力、気力が強くなければ生き抜くこともできなかったのである。従って、初めて内地から来た人は、心身共に耐えられなくて、早く死んでしまったようである。

寒さと、食料が無いのだから……、食事はバター缶に粟アワ、粥の朝食、昼は黒パンが食料で、三五〇グラム。スープは誰かに取られてしまうので早く飲み、黒パンは昼食用だから、仕事をしたその場で食べてしまわねば他の者に食べられてしまう。

昼は、十人に一人の歩哨がついて、山へ入って伐採をする。四メートル×一メートル、四平方メートルが一区画、二人で一つがノルマで、毎日、作らねばならない。

そして車がある所まで山の中を運んで来なければならぬ。初めは道に近いところの運搬であるが、だんだん道までの距離が遠くなる。また、枯れた物だけを材料にするから、枯木はだんだんと遠くへ取りに行かねばならない。

この作業は二人でコンビだから、十人が揃わぬと帰れない。そのため、協力し合わねばならない。民家へ持って行って売るのでから、買う人は、いちいち検査をする。

兵は、検査が通るのを待っていないければならぬ。検査が通らなければ帰れない。現場から宿舎までは、歩いて三十分かかる。凍っている時はいが、溶けると貨物が道路に沈んでしまう。

また、凍傷となると指が折れてしまう。すると、栄養失調となる。そのために半分以上の人が

死んでしまった。内地から来た人は、気候に馴れぬから多く死んでしまった。満州の気候や風土に馴れた人でなければ生き抜けない。

死体を埋めるには、穴を掘らねばならないが、穴は凍ってしまって掘れない。掘っている人が、また疲れて死んでしまう。生きている人が代わり働かなければ、ノルマが達成できない。

それを毎日やっている。ソ連国境で重労働させられて、方々から帰る者の集まるのを待って、昭和二十三年十二月四日、舞鶴に着いた。

帰還船が大きく港へ入れず、伝馬船で人間を運ぶ。アメリカのMPが、検査をして、共産教育を受けた者は、二週間待機させられた。私は待たされ監獄行きで毎日調査する。入党経緯を調べられる。二週間調べられる、その間舞鶴にいた。食事はさせられたが、共産党教育を受けたたと監獄で調べられるようなもので、片足で蹴飛ばされる。

終わりには「そんなら、そうと言えよよいの

に」と言われた。舞鶴では着てきた物は全部焼却され、裸になりリュックサックに荷物を詰め、日本国どこへも行ける切符を支給され、食事代として二、三百円くれた。また着る物は新しい物を買って、やっとさっぱりとした気持ちになれた。

その後、県庁へ行って検査を受け、金は国債十万円と、銀杯、海部総理名の書状を頂いた。

今も体は元気でダンス、カラオケなどで心を安めている。

私は、満蒙開拓団にいたから、強い肉体となり、寒さにも耐えられ、生きて帰ることができたのである。内地から、満州・シベリアへ来た人が、多く死んでしまったことを思うと、私は、心身を鍛えたお陰で、生き残り、今日の幸を得ることができたのだと、感謝の日々を送っている。

## 死ぬべき命永らえて

往時を想う

愛知県 小川 肇

大正八（一九一九）年九月十九日、名古屋市中区で生まれ、昭和十六（一九四一）年四月、名古屋で徴兵検査を受け甲種合格となった。昭和十四年の徴集兵であるが、学業のため二年延期したわけで、大東亜戦争が開始されたことによって名古屋の歩兵第六連隊へ入営となった。従って、兵籍簿には昭和十七年一月十日、陸軍二等兵、第二十九師団歩兵第十八連隊要員として、歩兵第六連隊補充隊第三中隊に入営と記されている。本隊の第三師団歩兵第六連隊でなく、第二十九師団歩兵第十八連隊（豊橋）に入営したのである。

初年兵の教育を受けている時の四月、米軍のB25爆撃機による本土空襲があり、我々の戦地出発